

第四章 骨髓バンク運動



九二年の年賀状には、入院中の出来事を正直に書いた。

《由美ちゃん、そして、おじさん、おばさん、ヒデくん、みんな元気ですか？ 私は九月から入院しています。髪の毛も全部抜けてしまいました。うちは何が何ともっています。カツラを愛用して元気に歩いています。うちのほうが引越して住所は変わりましたが、電話は変わっていません》

(小川由美子)

その由美子から、タイムングよく電話がかかってきた。姫路に住んでいる幼なじみの由美子には、ちょうど頼みたいことがあったのだ。

「白血病で亡くなった患者さんの本があるんだけど、こつちじゃ売ってないのよね。姫路の人だから、由美ちゃん探して送ってくれないかなあ」

由美子には探す必要がなかった。由希子が望む『永遠の愛を誓って』二十歳で逝った成美さんの記録』(JICC出版局)は、姫路ではどこの書店にも並んでいるベストセラーだ。しかも、主人公の安積成美あづなるみが通学していた姫路西高校は、由美子の卒業校でもある。

「でも……」

口こそ出さなかったが、由美子にはためらわれるものがあった。由希子が白血病であることはとくに知っていたが、髪の毛がすべて抜けたというのは、悪化しているからではないかと思ったのである。それに安積成美が亡くなった八九年三月は、彼女が成人式を済ませて二カ月後である。由希子もまた近く成人式を迎える。果たして、読ませていいものかどうか……。

結局、電話での由希子の明るい調子を聞いて、要望に応じた。送られてきた本を読み終わった由希子は、成美の両親の勇政まさこ子に手紙を出した。

《自分と成美さんが重なって、涙を流さずにはいられませんでした。本を読んでいる、自分と同じ年ごろの同じような悩みを抱えていた成美さんが、とても他人事とは思えず、一生懸命生きた姿を本にして下さった成美さんを囲んでいた周りの人々に、私わたしがありがとうと言いたかったので、こうしてお便りした次第です。迷惑なことだったかもしれませんが、ですが、私はこの本を読んで涙したと同時に励みになりました。成美さんの気持ちが痛いくらい伝わってきます。でも、私は一生懸命生きることの素晴らしさを知り、本当にこの本に、成美さんに出会えてよかったです。どうもありがとうございます》

うございました》(一月30日)

政子からすぐ返事がきた。成美の両親とは一度も会うことがなかったが、このあと由希子は五通の手紙を出すのである。

《親元を離れた遠い国での病気はとても辛かったけれども、私は告知されてよかったと思っています。もし病名を知らずにいたら、あれこれといろんなことを疑い、しかも誰にも聞けずに一人で苦しみ、不安で仕方なかっただろうと思います。知っていたほうが、お医者様にも接しやすいだろうし、私も納得して治療ができます。成美さんに教えるべきであったかどうか、お母様は今でも思い悩むことがあるそうですが、成美さんは恐らく知っていたのではないかと私は思います。でも聞けなかったのではないでしょうか。いずれにしても、成美さんには周りの人の思いが病気よりも強く分かっていただいでしょう。患者にとつて一番嬉しいことは、やはり周りの人の支え、励ましだと私は実感しています。成美さんには素敵なご家族と恋人、友達が何よりの宝物であつただろうと思います。私がこうして強く頑張れるのも、本当に周りの人の支えがあつてこそなのです。絶対病気に勝つて、天国にいる成美さんにも喜んでもらえる日がくることを、心から願います》(3月20日)

『永遠の愛を誓つて』は、成美と恋人の往復書簡を中心にとめてあるが、成美がどの白血病なのか由希子にはわからない。教えてほしいと率直に手紙を書いたところ、政子から急性骨髄性白血病であつたことを教えられた。

《一緒に入院していた年下の女の子も、成美さんと同じ病気で、親族から移植を受けました。一年以上もの入院生活の後の移植であり、彼女は病名を知らずに移植を受けました。私は彼女に自分の病名を言いました。彼女は「白血病か……大変だね」と言っていました。私は彼女の治療を見て、彼女の病名には薄々気がついていたけれど……。彼女のお母様はまだ娘に病名は言えないと言います。私にはその気持ちがかかります。日本の状況はまだ告知しないのが普通のようなのです。でも、骨髄移植という方法によって不治の病ではなくなりつつある今、告知の問題もやはり注目すべきところですね。成美さんに移植がおこなわれなかつたことが、とても悔しい。私も今、こうして生きているのに、その方法が目の前にあるのに、提供者がいなくて白血病に勝てない。とても悔しくて、でも周りの人の温かい支えにより生きています。素晴らしさを知って、本当に複雑な心境です。でもきつと治つて、誰にも味わえないほどの人生(もちろん幸せな)を送りたいと思っています。成美さんの分

まで絶対生きてみせます》(5月31日)

入院中には、大谷貴子の『霧の中の生命』(リヨン社)も読破した。この時期、由希子は『エリー』少女と白血病の闘いの記録』(保健同人社)など、白血病を中心にした闘病記を何冊か購入した。発病直後は病気そのものを説明してある医学書に目を通していたが、このころになると「いかに病気と闘うか」に関心を深めていたのである。

■啓発ビデオへの出演

九一年十二月に発足した骨髓移植推進財団は、日本骨髓バンクを構成する一組織として、ドナー(骨髓液提供者)を募集する重要な役割を担っている。募集に当たってのPR用ビデオを作成することになっていたが、磯和夫が勧めたのは、そこへの出演だった。

実際の撮影は、九二年一月二十四日におこなわれた。東京のTBSビジョンから、チーフプロデューサーの黒沢郁夫ら四人が自宅までやってきた。

「ごく普通の生活ぶりですすよ」

黒沢が気さくに声をかけてくれたが、実はスタッフはヒヤヒヤしていた。ビデオを完成させるには、ほかに数人からの取材が必要だが、一週間前に収録した患者が亡くなってしまった、落ち込んでいたのである。

由希子にそんな事情がわかるわけもなく、由希子自身は快活に振る舞った。元氣の出る理由があった。それが饒舌にさせてもいた。まぎれもない恋人となる土田茂隆(仮名)との出合いが、年末にあったばかりだったのだ。

「それは、だれかにプレセントするもの?」

テーブルの上のセーターを、目ざとく見つけた黒沢が質問した。待つてましたとばかりに、由希子は「彼氏」と答えた。

きっぱりした言い方といい、屈託のない明るさといい、本当にこれが白血病患者なのかという顔を黒沢はした。

「強く生きなきゃいけないと思ったのは、どのあたりからなの?」

由希子の個人情報、そう持っているわけではなさそうな黒沢が聞いてきた。

「病気だと、とくに白血病だというと、周りにすごく同情されるんです。わたしって、そういう人生はいやなんです。病人だからということじゃなくて、同じ人間として付

き合ってほしいと思うから、わたしもそれなりの生き方をしなくてはと考えています」

ちよつとかつこよすぎるかなと思ひながら、こういう言葉が出るのは、やはり土田茂隆を知ってからかなと由希子は思う。茂隆と接するときは、どういうわけか由希子自身が病人であることを意識しないで済むのである。

ほかの人はそうではなかった。どこかに、相手は病人だからという面が出ていた。それは仕方ないことだと頭では感じながらも、やはり同情されるのはいやだった。茂隆に好感を持ったのも、顔がどうか表面的なことではない。どちらかという、由希子には茂隆がとびきりハンサムだとは思えない。要するに、気持ちよく付き合える対象なのだ。

黒沢郁夫らは買い物風景も収録して、ほぼ半日がかりの撮影は終わったが、このときの情景は『いのちの絆』^{きずな}として、骨髄移植推進財団のビデオ第一号にまとめられた。移植を受けて助かった元患者の立場から大谷貴子も出演しているが、由希子のメッセージが、初めて「患者自身の訴え」として世の中に広まることになった。

冒頭に元プロ野球巨人軍の王貞治（財団顧問）が登場するこのビデオで、財団初のキャンペーン・ガールとなった由希子は、こんなことを述べた。

「病名を聞いたときは知識がなかったですから、骨髄移植があるなんてことも知りませんでしたし、死ぬんだなと思って葬式の写真のことや、あと友達に手紙書いたり遺書を書いたり、そんなことばかりやっていました。でも、日本に帰ってきて骨髄移植があるって聞いて、いろんな治す方法があると知って、治る方法があるんなら自分ができるだけのことをやりたいと思います。自分ではできるかぎり普通の生活をしていきますが、そういう生活をしているときは自分が病気だと感じません。自覚症状もそうなくて、自分が病気なのかと本当に疑いたくありません」

顔の肌が荒れて映っているのは、アトピー性皮膚炎のせいで、白血病の影響ではない。成人式を迎え、茂隆と知り合えたこともあって、病氣らしさを全く感じていなかった。

「もし旅行に行ってもいいよって言われたら、ニュージーランドへ行きたいですね。向こうの家族にも心配かけたし、元気になったよって言ってきたんです。白血病についてなんです、知らない人だったら全然興味ないと思うし、実際、私もそうでした。だけど、善意がある人だったら、こういう、人が一人救われると思ってくれる心があるのなら、ぜひ協力してほしいです」

成人式を終えてからの由希子は、毎週月曜日に病院を訪れて診察を受けるほかは、自由な時間を過ごしていた。一回目の退院のときと違っていたのは、恋の対象を得たことだった。

「由希ちゃん、東京でシンポジウムがあるんだけど、一緒に行ってみない？」

二月に入って、大谷貴子が電話をかけてきた。骨髄移植推進財団の啓発ビデオには出たものの、それ以後、これといって由希子の出番はない。テレビ愛知の放映が評判よかったこともあって、貴子なりに計画を立て始めていたのである——もっと幅広く出てもらって、ドナー募集の先頭に立ってくれば……。

骨髄移植を受けて四年を経過していた貴子は、東海骨髄バンクの理事であったし、持ち前の積極性から、ドナー募集につながることもならと、招かれれば全国のどこへでも出かけていた。骨髄移植推進財団が発足してからは評議員となり、同時に普及広報委員会の副委員長をおおせつかっていた。

分身の術でも使いたいくらいの忙しさだ。幸い、由希子という「後継候補」があらわれた。由希子を育てようと決めたのだ。それには、患者関係者やボランティアが多

く集まるシンポジウムで、雰囲気を実感してもらう必要がある。

由希子も、時間だけはたっぷりある。母の知香子といっしょに出席することにした。二月二十三日に東京・芝青年会館ホールで開かれたシンポジウムは「骨髄バンク事業開始記念」と銘打って、骨髄移植推進財団と全国骨髄バンク推進連絡協議会との共催となった。ドナー募集に当たって、全国のボランティア団体の力は絶大なものがある。この日も、会場設営には多数のボランティアが協力した。

シンポジウムには、一定のスタイルがある。専門医による骨髄移植の解説と、実際に骨髄移植を受けた元患者、そしてドナーとなった人が出席してのパネルディスカッションが、必ずといっていいほど組み込まれる。パネルディスカッションに代えて、元患者やドナーが体験談を語る形式になることもある。

この日のシンポジウムでは、東海大学医学部小児科の加藤俊一助教授が基調講演をした。図表を使つての加藤助教授の解説は非常にわかりやすく、由希子にとっては、初めて体系的に骨髄移植の基礎知識を学ぶ場となった。

歌手の刀根麻理子と初めて会ったのも、このシンポジウムでだった。彼女も由希子と同じで、純粹に個人の資格で参加したのだが、目ざとく見つけた由希子はサインをねだった。刀根麻理子自身、これを機に、しだいに骨髄バンク運動にのめり込んでい

くことになる。

シンポジウムを終えてから、同じ青年会館でレセプションが開かれた。

「ダーリン！」

由希子がそう叫んで駆け寄った相手は、一回目の入院で主治医を務めた赤塚美樹医師だった。東京のがん研究会付属病院に転勤していたので、ほぼ一年ぶりの再会である。相手が医師であろうと、物おじしない由希子は、入院中に赤塚医師を「ダーリン」と呼んではばからなかった。入院中にてこずらせたことなど、すっかり忘れていた。

レセプションのあとは、有志だけの二次会が東京タワー近くの居酒屋で開かれた。ボランテアが熱っぽく語り合う姿を見て、由希子は、今までの生活でよかったのかと、ちよっぴり反省している自分を発見した。

■初めての講演

講演会で体験を話さないかと、大谷貴子から持ちかけられたのは、四月半ばのこと

だった。東京の骨髄バンクシンポジウムに出席してから、早くも二カ月が経過していた。三月下旬には東京のテレビ局の取材を受けたが、大勢の前で語るのは初めての体験になる。

福島県のボランテア団体、いわき骨髄バンク推進連絡会議の代表を務める陽田秀夫ひょうたひでおからの依頼である。秀夫は、妻・茂子しげこが慢性骨髄性白血病だった。

陸上自衛隊の郡山駐屯地で、ドナー登録を呼びかけるチャンスができたのだ。数百人が集まるという。人数を聞いて、少し不安になった。

「飾る必要はないのよ。由希ちゃんが経験して感じたことを、そのまま素直に話せばいいんだから」

そうはいつでも、貴子は話し慣れている。本当に、わたしに素直に話せるだろうか……。もつとも、由希子にはそういう不安より、好奇心のほうがはるかに勝っていた。東北へは行ったことがない。中学の修学旅行で訪れた日光が、由希子にとって最北だった。郡山行きはたちまち決まった。

そうしたら、郡山の翌日に岐阜でシンポジウムがあり、そこで特別発言をしてくれないかという要請も舞い込んだ。岐阜骨髄献血希望者を募る会を、シンポジウムと同時に発足させるのだという。

「売れっ子になってきたのよ、由希ちゃんは」
 貴子に言われてみれば、少しは感じていた不安が消えて、体験を語れる機会を望む気分になっていた。

福島へ向かったのは、自衛隊での講演前日の四月二十三日である。貴子と一緒に東海道新幹線、東北新幹線を乗り継いで行くのだが、名古屋駅から東海道新幹線に乗るため、二人が合流するのに都合のいいJR中央線金山駅で待ち合わせをした。

駅で顔を合わせたときから、もうしゃべりっぱなしになった。ホームに入ってきた電車に乗って、車内アナウンスを耳にした貴子の表情が変わった。おしゃべりに夢中になって、いつもの習慣で帰宅する方向の電車だったのだ。次の駅で名古屋方面行きに乗り換えたが、時間がぎりぎりになってホームを走った。なぜ走らなければならなかったのかを由希子が教えられたのは、かろうじて間に合ったばかりの車内であった。額から汗が噴き出していた。

郡山までの車中でも、とにかく話題の尽きることがない。ほぼ四時間、しゃべりっ放しだった。

「陽田さんはね、骨髄バンク運動の七不思議って言われているわ」

陽田秀夫には東京のシンポジウムで会ってはいしたが、とにかく大勢の人に出会った

から、だれが秀夫であったか印象に残っていない。茂子とは初対面になる。間もなく会う夫妻について、貴子が説明する。

「茂子さんが、とてもきれいなんですよ。陽田さんは、まあ普通のおじさんかなあ。だから、あの陽田さんが、どうして茂子さんを射止めたのか、とても不思議やないのってわけ」

なるほどと由希子が感じ入ったのは、陽田夫妻に直面してからだ。郡山に着いてすぐ乗り換えて、磐梯熱海のホテルに入った。夫妻が歓迎してくれた。

「娘も、ゆきこっというのよ」

夫妻の長女は有紀子だ。字は違っても同じ読みをする由希子が、同じ病気ということもあって、茂子にはあかの他人とは思えないらしかった。

こんな話題から始まったホテルでの夕食は、豪華な献立だったのだが、急いで食べ終わらなければならぬのがつらい。郡山市内の安積商工会館で夜、一般市民を対象にしたシンポジウムを開くので、そこへも顔を出してほしいと、ホテル入りしてから依頼されたのである。

商工会館での講演が、由希子にとって文字どおり初めての講演になったが、由希子はほとんど泣きどおしだった。由希子の前座に立ってくれた貴子が、聴衆の涙を誘う

ような話題を披露したら、由希子までが涙にくれてしまったのである。

翌日は、郡山駐屯地での講演だ。会場には体育館が充てられた。

普通のシンポジウムだと、たいがい主役を務める貴子が、この日も前座となった。さすがに慣れたしやべり方だと、由希子は感心する。

いよいよ出番となった。話す内容は原稿にまとめてある。前夜の教訓を生かさなければならぬ。泣かないようにしなくては……。何度も原稿を読み返した。不思議と緊張感がない。わたしって、度胸あるのかしら……。そう感じながら、由希子はマイクの前に立った。

「発病したのは、留学先のニュージールランドででした。身体がだるくて、つらいなって感じていたんですが、それは英語だけの中で生活する緊張や、食べ物の違いからくるのかなって思っていました」

発病から持ち直して帰国し、名古屋の病院で治療を受けるまでの経過をまず語った。「わたしには、長くてもあと一年半しか時間がありません。そのあいだに骨髄移植を受けなければ死んでしまいます。そうすると、二十一歳で死ぬことになります。発病してもしばらくは、漠然と生きてきました。死について考えることもありませんでし

た。だけど、いつかは死ぬんだと考えたとき、本当に……」

胸がこみあげてきた。じつところ見える。数秒して立ち直った。

「宝くじにも雑誌の懸賞にも当たったことのないわたしが、どうして白血病に当たってしまったのか、悔しくてなりません。でも、骨髄移植という治療法があります。ところが、骨髄液の提供者がいらないんです。わたしと同じように、提供者を探し回っている患者さんが大勢います。あなたの骨髄液が、だれかを助けるんです」

体育館に集まった五百人の、一人ひとりの目を見つめられるような余裕さえ生まれできた。

「今は患者ですから、こういうことしか言えませんが、助かったら、もっと第三者的な立場でいろんなことが言えるようになると思います。そこまで、わたしを生かしてください。お願いします」

時間にしておよそ十分の話は終わった。

この日をきっかけに、いわゆる「自衛隊巡り」がつづくのだが、それは郡山駐屯地の幹部が、由希子の講演を機に積極的になったからだ。発端は、長男が慢性骨髄性白血病の駐屯地曹長・坂本豊和の提案である。

講演当日、所用で外出していた駐屯地司令の代わりに出席した業務隊長の内村彰和

一佐が、由希子の話を聞いて力強い協力を申し出たのだ。講演を終えて、由希子らは内村一佐の部屋に請じ入れられた。

「ドナーになれる最大条件のHLAは、両親から受け継がれるために、両親の出身地に適合者のいる確率が高いんですよ」

貴子の説明を受けた内村一佐は、講演のときから「これは、おれがやらなきゃならん仕事だ」と感じていたから、素早く由希子の両親の出身地を頭に描いた。

父の出身地大分県には駐屯地が三カ所ある。母の生まれ育った愛知県には、周辺を含めるとかなりの駐屯地が集中している。防衛大学校十一期生の内村一佐は、同期生の顔と所属とを、やはり頭の中で組み合わせていた。

「よし、わたしが各地の駐屯地に根回ししてあげるよ。大分の湯布院にも、愛知の守山にも親しいのがある。講話の機会をつくってくれるよう、連絡をとろう」

貴子から「由希ちゃん、よかったねえ」といわれ、心の底から嬉しかった。その表情がまた、内村一佐の気持ちを奮い立たせたようだ。

■みんなのためのドナー

郡山駐屯地で由希子が訴えかけたのは、「わたしのため」ではなく「わたしを含むすべての患者のため」のドナー登録だった。

そのことを由希子がしっかりと把握するようになったのは、骨髓バンク運動に乗り出して「大人との付き合い」が増えたからである。

大人の中でも、とくに大谷貴子の影響が大きい。郡山からの帰り、翌日に岐阜シンポジウムを控えていることもあって、貴子はさらに「みんなのためのドナー募集」の大切さを強調した。あたかも「車内教室」になったのである。

「骨髓バンクができていなかったころは、なにになにちゃんを助ける会というのができて、患者さんのためにドナーを探す運動があったんやけど、そういうふうにしてドナーが見つかったためしが、日本ではあらへんよ。借金だけが残った家族もいはるわ」

例外として、生後三カ月の女兒のために八三年八月、中日新聞の呼びかけに応じた提供希望者の中に、二人の適合者がいただけだ。女兒のHLAが比較的ポピュラーだったのが幸いした。

「そんなに見つかりにくいのに、ドナー登録者と患者が複数になれば、適合率はうんと高まるんよ。東海骨髄バンクでも、もう三十例以上も移植にこぎつけているもの。だから、ドナーをたくさん集めることが何よりも大事なわけね」

九一年十二月の骨髄移植推進財団発足を受けて、ドナー登録の受け付けが九二年一月に始まったが、患者登録がいつからになるのか、この時点では未定だった。

「車内教室」ではまた、貴子の失恋経験を聞くことができた。

「病気になったとき二十六歳だったわたしには、婚約者がいたのよ。病気じゃなかったら、すぐ結婚していたはずだわ。彼も苦しかったんだと思うけど、結局別れることになっちゃった」

移植を受ける前までは、病院にやってきては励ましてくれたという。別れることになった本当の理由は明かしてくれなかったが、それに比べて土田茂隆は、由希子が白血病患者であることを知っている。それでいて、交際することを快諾してくれた。わたしは幸せなんだと、由希子は思った。

ところで、岐阜シンポジウムも「みんなのためのドナー集め」の一環であった。

由希子は「骨髄提供者を待つ二十歳の女性の熱き思い」を語った。このときも原稿

を用意していたが、制服姿の自衛隊員と違って、ごく普通の人々が聴衆だったせいかわ、感きわまってハンカチを取り出すことが多かった。

話の展開は郡山のとくと同じで、ニュージーランドでの発病から始まった。それを受けて、名古屋の病院での治療に移る。

「入院した病棟は、わたしにはとても信じられない光景でした。ほとんどの患者さんの髪の毛がないのです。私もこんなふうになるのか、もう死ぬんじゃないかと本当に怖かったです。三カ月の入院中、髪の毛は抜けませんでした。これはきつと誤診じゃないかと思ったものです」

その後八カ月の通院を経て、二度目の入院中に髪の毛が抜け始める。

「大切にしてきた自慢の髪の毛がみるみるうちに抜けていきました。覚悟していたはずなのに、ちょうど成人式前だったので、とてもショックでした。私はやっと病気の重さを実感しました」

シンポジウムに参加した人たちは、目の前の由希子が、カツラ姿であるとはどうしても信じられないらしい。カツラをとった姿が想像できないのだ。

「発病してからもう二年近くなるわたしには、時間がありません。わたし一人がいなくなったら、世界中の人がどうなるわけでもありません。でも、わたしは生きたい

のです」

ここから、話の内容に変化があった。

「病気になって、わたしの人生は変わりました。変わったというよりは、始まったのかもしれない。わたしは病気になって初めて、生きるということの大変さと素晴らしさがわかったような気がします」

横で聞いていた貴子が意外そうな顔をした。郡山の講演のときにはなかった言葉が出たからだ。由希子なりに、病気と真正面から付き合おうと覚悟したのである。

「これまでのわたしは、ただ漠然と生きてきたように思います。楽しいこと、つらいこと、喜んだり、泣いたりしたけど、死という恐怖に遭ったことはありませんでした。だれにでもいつかは必ずやってくる死ですが、いつもそのことについて考えなければいけないというのは、言いようのない苦しさです」

締めくくりに入る。

「たくさんの方たちの努力で、公的骨髄バンクがようやく設立されました。設立を望んで、一生懸命病気と闘いながら生きてきた人、残念ながら力尽きて逝ってしまつた人たち……」

磯和夫をはじめ、亡くなっていった人々が思い出されてならず、声が詰まった。

「私たちにとっては、骨髄バンクこそが一筋の光なのです。骨髄移植をすれば助かるかもしれないのです。助かる方法があるのに、提供者がいないために死んでいくのは、とても耐えられません。骨髄提供するのは、とても勇気がいると思います。提供者の麻酔事故だって、百パーセントないとは限りません。でも、わたしたち患者も死と隣り合わせなのです」

骨髄提供に当たって、ドナーは全身麻酔をかけられる。その麻酔が全く安全とはいいきれない。ドナーを増やしたいと思うあまりに、「全く問題はありませんよ」と呼びかける人もいないではなかったが、由希子はきわめて正確に発言したことになる。このことも『車内教室』で貴子に教えられた。実際に、この四カ月たらずのちに、兄弟間の骨髄移植ながら、重大な麻酔事故のあったことが報じられるのだ。

「わたしと同じように苦しむ人々に、どうか生きるチャンスをください。白血病は今や不治の病ではないのです。骨髄移植で助かるのです。私は、それを証明したいのです。長生きすることができたら、つまらない人間で一生を終えたりしません、ここでお約束します」

由希子は、強い決意を示した。

「今、こうして病気と前向きに闘えるのは、わたしを支えてくれるたくさんの人々の



おかげと、私^がまだ希望を捨てていないということだと、自分では思っています。わたしには絶対明るい未来があると信じています。提供者が早くあらわれることを、心から祈っています」

郡山より長い十五分ほどの講演中、とくに女性に涙をこぼす聴衆が多かった。

■ 刀根麻理子との再会

歌手の刀根麻理子と再会したのは、岐阜シンポジウム前日の四月二十四日だった。郡山から名古屋に戻ってきた日である。

「これから、刀根さんに会うんよ」

五月に予定されている佐賀でのチャリティートークショーに、刀根麻理子、大谷貴子がそろって出演することが決まっていたが、実は麻理子とは二月の東京シンポジウムで初めて顔を合わせただけだった。そのため、佐賀シンポジウムを取り仕切る九州骨髄バンクの田中幸一^{たなかこういち}が立ち会って、二人が親しくお互いを知ろうということになったのである。

刀根麻理子は、四月から中部日本放送（CBC）にレギュラー出演するようになっていた。土曜日の午前中に放送している『秀才組！ 土曜チェック』という生番組だ。前日の金曜にはリハーサルのため名古屋入りして、市内のホテルに泊まるスケジュールがつづくのである。

貴子に言われた由希子は、まっすぐ帰宅する予定を変更して名古屋駅で降りた。刀根麻理子は、番組の打ち合わせを終えて名古屋市内のホテルで待っていた。

ホテルの部屋は割合と広い。二人に加え、幸一と由希子が入っても息苦しさは感じられない。

移植を受けるための入院生活を、貴子は身振り手振りのアクションをふんだんに交えて、麻理子を笑わせる。貴子の独演会を、幸一と一緒に由希子も見詰めていた。ひとときりつづいたあと、由希子も話の輪に加わった。

「これカツラなんです」

由希子が、腰の近くまであるロングヘアに手をやりながら説明した。

「えっ？ 全然そんなふうには見えないわよ」

「そうでしょ、うまくカムフラージュしてあるから、気がつく人はいないのよね」

ひたいの生え際にはヘアバンドをしていたから、言われて注意深く見てもカツラと

はとうてい思えないと、麻理子はしきりに感心する。「とつても元気そうじゃない。患者さんと言われなければ、普通の人と変わらないわ」

励ますつもりで言った麻理子を、ひたと見詰めるように由希子は言い放った。

「でも、患者であることには変わりありません。白血病になる患者さんは、毎年新しく五千人から六千人いるんですけど、日本の人口に比べると五千人なんてほんのちょっとですよ。私はその中に選ばれた一人だと思っただけです」

治療を含めてつらい病気だと知っている刀根麻理子には、そんなふうを受け止める由希子が、わずかに二十歳の女の子にはとても思えない。自分自身が芸能界に入ってきたってきいた道筋を考えると、人間関係で悩んでどん底に追い込まれたとき、立ち直るのに五年くらいかかったことがあると打ち明けた。

由希子は、麻理子とは年齢がほぼ一回り離れている。

「だから、わたしは選ばれたチャンスが無駄にはしたくないんです。絶対に病気を克服して、バンク運動のお役に立ちたいんです」

思いつめて語っているのではない。貴子と共通するように、実に明るく、そして強い意志を込めている。

「わたしも頑張らなくっちゃ」

そんな気分になった麻理子は、六月に入って、タレントのケント・デリカットとそろってドナー登録をすることになる。

由希子はこのあと、五月二十日に東京で開かれるライオンズクラブ主催のシンポジウムで、「二十歳の乙女の願い」を短時間でも話す予定だった。ところが十六日に熱が出て、身体がいうことをきかなくなつた。十八日に病院へ行つたところ、扁桃腺が腫れていた。熱は翌日からようやく下がりはじめた。

行く気になれば行けないこともなかったが、大事をとって、東京のシンポジウムでは貴子に代読してもらつた。あとで、そこへ海部俊樹元首相夫人の幸世も出席したと聞いて、多少の無理をしても参加すればよかったと思つたものだ。

海部幸世は、五月三十一日の全国骨髄バンク推進連絡協議会第三回総会で、会長に就任した。全国協議会は発足してから、ずっと会長不在のままだったが、ようやくトップを迎えることができたのである。

千葉県木更津の陸上自衛隊第一ヘリコプター団に招かれたのは、六月十七日である。講演は午前中だから、郡山のときと同様、前日に木更津入りした。

木更津へは、テレビ局の取材スタッフが二組同行した。スタッフとともに、ヘリコプター団に近いホテルに泊まった。

部屋は洋室だが、パジャマではなく浴衣ゆかただったから、由希子ははたと困ってしまった。

「弱ったなあ、どっちだったっけ」

袖を通して考え込んだ。襟は左が前か、それとも右か、わからなくなってしまったのだ。

迷うほど、どうにもわからなくなって、貴子の部屋に電話をかけて尋ねた。

「なんで、そんなこと聞くの」

「だって明日になって、もし、わたしが冷たくなってたら、言われちゃうじゃないの」

「なんて？」

「この子は死を覚悟していたんだ。ほら、死に装束にしてベッドに入ったんだもの、つて、きつとみんな言うよ」

生きることへの執着だった。だが、貴子にも即答できない。自分自身が移植を受ける前には、そんなことを考えもしなかったし、貴子自身、和服を着ることは滅多にない。

「テレビ局の人に聞いてみるわ」

すったもんだの騒ぎのすえ、左前というのは、相手から見て左の襟を前に出すことだとわかった。

翌朝、ヘリコプター団に着いたら、建物がずいぶん古い。聞いてみれば、太平洋戦争中のものもまだ残っているという。講演をする講堂もそうらしかった。

この日も、貴子が前座を務めたが、貴子の話を聞きながら、早くも由希子自身が涙をにじませた。

目を赤くした由希子が、講堂の中央に進む。始まりは、やはりニュージージーランドからだったが、この日はやや詳しくなった。

「最初のお医者さんには風邪と言われ、わたしもそれを信じてゴロゴロしていました。

でも四十何度の熱がさがりません。日本にいたら、そのままほっておかれたかもしれないませんが、ホストファミリーのお母さんが『預かっている大切な子だから』って、別の病院に連れて行ってくれました」

そのときも、やはり診断は風邪だった。

「目まいはするし、耳鳴りで夜も眠れなくなって、やはりおかしいなと思ったんです」

三カ所目の大病院でようやく最終の診断が下された。

「大谷さんが急性転化をおこしたときの白血球数は九万だったのですが、わたしの場合は五十万近くもあったそうです。意識がもうろうとして、ポーツとしてよく覚えていないんですが、私の血は本当に白く見えたと言われました」

医師は「リユーケミア」と病名を告げたが、医学用語が理解できるほどには英語力がついてはいない。英和辞書の邦訳には「白血病」と書かれてあった。

「それから医者さんは『あなたは、あと二週間しかもたない。何かしたいことはなにか』って言うんです。あれ、聞き取り方が違ったのかな、二年とか二十年とか言ったんだらうと思って、聞き直しました。間違いなく二週間だったんです」

付き添っていたホストマザーが泣き崩れた。

「わたしも、目の前が真っ暗になって涙があふれてきました。どうしよう、もう日本に帰れない、友達と会えないまま死んじゃうのかって、とても悲しくなりました」

それが、二週間後には帰国できるほどに回復した。

「誤診だと思いました。名古屋の病院に入院したときには、体重が六十五キロもあったんですから、わたしが病室にいるのが場違いって感じだったんです」

入院中の話がつづいたあと、前夜の浴衣の襟の打ちあわせを語った。一日もたたないうちに、すぐに話題にした由希子を、大谷は感心したように見ていた。しかも、その場に応じた話し方もしたのだ。

「自衛隊の方は、災害派遣などに行って、もしかしてそこで死ぬかもしれないというような恐れはありませんか？　そういうのと比べれば、骨髄移植はとっても安全だと思えます」

骨髄移植に懸けたい思い、提供者が見つからない苦しさを述べながら、聞いている隊員に指を向けた。

「もしかしたら、この中に、わたしのHLAと合う人がいるかもしれないという気持ちでいっぱいです。それは、あなたかもしれない、それとも、あなたかもしれないんです。わたしのような患者を、ぜひ救ってください」

指さされた隊員が、その後登録したかどうかは定かではないが、心にぐざりときたことだけは確かだろう。

講演のあと、食堂で昼食をとった。ヘリコプター搭乗員には牛乳やバナナなど、特別の加給食がつく。隊員と同じメニューが出されたものの、由希子にはすべてが食べきれなかった。

「一度でいいから、ヘリコプターに乗ってみたいわね」

あらかじめ意向が伝えられていれば不可能ではなかったようだが、この場でいきなりでは難しいという。

「移植が実現できて、病気が治ったらまたきてください。闘病報告を聞きながら、そのときはヘリコプターに乗っていただきますよ」

言った自衛隊員も、それが実現すればどれほどいいだろうと考えていた。

■父のふるさと入

骨髄移植推進財団が患者登録の受け付けを開始したのは、ようやく六月二十二日の

ことであつた。財団が発足したころは「二月か三月にも」といわれていたから、この遅れは患者や患者家族に焦りを生んだ。

ようやく財団への登録が開始されたとはいえ、HLAの適合ドナーを見いだして移植にこぎつけられるには、さらに時間が必要になる。

講演では「みんなのためのドナーになって」と訴える由希子にも、焦りというものは当然ある。ないほうがおかしいくらいだ。

地元愛知県自衛隊駐屯地二カ所を訪れたあと、大分県内にある三カ所の陸上自衛隊駐屯地を巡ることになった七月、足を延ばして父・徳幸の生まれ故郷である姫島へ立ち寄る計画を立てた。骨髄バンクのドナー登録に協力を求めるためである。

HLAは両親から受け継ぐため、同じような型は両親の生まれた地域に比較的多いといわれている。姫島の人々に登録してもらえば、ひよつとして同じHLAを持つ人がいるのではないかと、ワラにもすがる気持ちがあつた。

姫島は国東半島の北側、周防灘に浮かぶ小さな島だ。人口三千人ほどで、島全体が村になっている。徳幸は高校時代までここで過ごした。

由希子は、あらかじめ村長に手紙を出して、村の協力を求めた。それは、やはり自分だけではなくて、多くの患者のために登録してほしいという内容だった。仮に自分

と同じHLAの登録者がいれば、それはそれでうれしいし、自分をきつかけに登録者が増えるなら、患者のだれかに適合する可能性があるから、それもうれしいのだ。

七月十四日に大分空港まで飛び、そこから国見ヘタクシーでたどり着いた。国見から姫島までは、村営の定期船で三十分たらずである。

島に着いてすぐ村役場に村長を訪ねたが、行政としてドナー募集に協力するのは難しいという返事だった。由希子は落胆したが、それくらいではめげない。徳幸の両親が健在だったし、由希子の明るさに、親戚の人々が協力を申し出てくれたのである。

ただ、この場合は由希子のためにHLAを調べることになる。二十人が村の診療所で採血した。一次検査の費用は一人当たり一万五千円かかる。徳幸が負担しようとしたところ、それはいいと口をそろえて言ってくれた。

「ほかに協力することができないのだから、このくらいの費用は自分たちで出ささ」検査結果のちにわかるのだが、適合者はいなかった。でも、由希子は協力をしてくれた親戚の人々への感謝を忘れなかった。

さて、この大分行きには、自衛隊巡りという大事な役目がある。

三方所を取り仕切ってくれたのは、郡山の内村一佐から連絡を受けた湯布院駐屯地業務隊長の松井和道二佐である。

「隊長のわたしが、講演が終わってから登録するので、そのことに触れていいですよ」

松井二佐はそう言ってくれた。

由希子の講演内容は、もう手慣れたもので、木更津での話し方がほぼ定型になっていた。別府では、女性の自衛官から質問が出た。

「ドナー登録をするときに、非常に不便だと聞いています。ですから、こうやって心を持つ者がいっぱい集まっているときに、集団で登録できるシステムがつくれないものでしょうか」

これには、由希子ではちよつと答えられない。本当なら日赤の関係者が答えるのが筋なのだが、代わりに案内役で九州骨髄バンクの田中幸一が応じた。

「そうなるのが一番いいんですが、登録に際してはビデオ観賞と、日赤職員による説明が必要なんです。やがては改善されていくでしょうから、それまでは、ご面倒でも骨髄データセンターまで出向いていただきたいと思います」

一日で三方所の駐屯地を回るのは、さすがに強行軍だった。七月というのに雨も加わって寒気をおぼえるくらいで、由希子はぐったりしてしまっただ。

■ テレビ出演

九二年の成人式に参列した模様を収録したテレビ愛知は、一月十七日夕方のニュース番組で由希子の姿を放映した。これが、初のテレビ出演だ。その後、各局が由希子を取材する。

放映予定が決まると、由希子は無邪気に知人へ知らせた。

《4月11日、テレビ朝日の6時からの『ザ・スクープ』っていうテレビに、ちょっとだけど出るので見てね。とかいって、カットされたらどうしよう……》(4月1日、遠藤実希子へ)

《『ザ・スクープ』に出てから、安積成美さんのお父様から励ましの電話を受けました。21日にはテレビにまた出ます。今度は日本テレビの『ルックルックこんにちは』です》(5月18日、小川由美子へ)

《16、17日は中京テレビでも同行で取材なので大変です。でも、これもドナー探しのため。自分の命を助けてもらうためだもの、頑張らなくっちゃ!!と思います》(6月12日、丸井和子へ)

《今月の22日か29日のどっちかの土曜に『ザ・スクープ』という午後6時からのテレビ朝日の番組に出るんで見てください。今回は彼もインタビュースされたので、見てくださーい。カッパを取って自毛で出ているおサルのような私も見ものですヨ》(8月17日、久保由紀子へ)

《9月10日にはTBSの『ビッグモーニング』という番組に出るんだよ。移植まではもうテレビに出ない予定だったんだけど、白血病って知ってる人って少ないうえに、みんな周りの人が白血病であることを隠したがって、なかなか出られないの。そういえば、中京テレビの『プラス1』にも出ます。白血病ナカホリは結構忙しい。2年前までは思いもしなかった道をてくてくと歩いています。全く人生って何が起こるかからん》(9月6日、赤星理香へ)

《『ザ・スクープ』、すっごいこっばすかしかった。しかし、キリンのイヤリングに目を止めてくれた人は、丸井さんだけ。あれはNZで買ったの。ちょっとブラブラゆれてて、テレビでは気になったね。ま、いっじゃん。それと未来のどんな様なんて言われるとテレルう。でもそれよりテレビで『愛する人』と表現された日には、もうはずかしもんでした》(9月15日)

文面からは、あっけらかんとした雰囲気しか感じられないが、由希子には意に添わない内容がいくつかあった。代表的なものが二つある。

一つは、あるダイレクターの質問だった。

「もし、ドナーが見つからなくて、一番悲しむのは誰でしょう」

由希子は即座に答えた。

「わたし自身です」

ダイレクターは、信じられないといった表情を露骨に示した。

「違うでしょ。ご両親や妹さんじゃないですか」

「いいえ、わたしです。わたしなんです」

だって、ドナーがいなければ、死んでしまうのはわたしだし、そうならば一番悲しいのはわたししかいないじゃないの。この人は何もわかってない……。そう考えると、涙があふれてきた。悔しかったのだ。ところが、画面では……。

「ドナーを待ち望む、ひとすじの涙」

そんなふうに使われたのだ。

二つ目は、画面いっぱいカルテの表紙が出たことである。由希子自身、見たことのないカルテだから、ビデオ画像を静止させて食いつけるように文字を見つめた。

「CML blastic crisis」

主傷病の欄にそのアルファベットを見つけて、由希子は大きなショックを受けた。

CMLとは慢性骨髄性白血病なので、告知されている由希子が驚くには当たらない。blastic crisisとは急性転化のことだ。それまで、由希子は直接、主治医から急性転化であったと聞かされたことはない。これ以来、それまで減多に使うことのなかった急性転化という専門用語を、由希子はかなり頻繁に使うようになった。

のちに由希子は、病気になってから受けたショックとして、親族にHLA適合者がいなかったこと、急性転化をテレビ画面で知ったことを挙げた。

■菅平セミナー

九州旅行から帰宅してしばらくは、自宅でじっとしていた。待望久しかった大ニュースがもたらされたのは、八月一日のことである。

「アメリカでドナーが見つかったよ！」

小寺医師から電話があったのは数日前だが、この日には病院に行って詳しい話を聞いたのである。全米骨髄バンクのドナー登録者およそ六十七万人のうち、わずか一人だったが、三次検査でも適合したというから、移植は間もなく実現するのだ。

「これで、わたしは助かる」

由希子は、心底そう思った。しかも小寺医師は、移植が日本で可能になるよう、最後の詰めのところまできているとも言ってくれたのである。

喜びが爆発したのは、八月八日と九日、長野県の菅平高原で開かれた全国骨髄バンク推進連絡協議会の、夏季セミナーの場であった。

このセミナーに、由希子も恋人の土田茂隆といっしょに参加した。より正確には、テレビ局の撮影のために菅平に行ったというほうがいいかもしれない。ドナーが見つかったことを受けての、長期取材のひとつまだったともいえる。

信越線の上田駅から、路線バスに一時間ほど揺られると菅平高原に着くが、セミナー会場のペンション・スカデイは高原の西側にある。参加者の多くは、バスに揺られるか、上田経由でマイカーを走らせるかだった。由希子と茂隆は、上田駅からテレビ局のクルーと一緒にペンションに着いた。

着いてはみたものの、大谷貴子はおろか刀根麻理子もまだ姿を見せていない。全国協議会のボランティアの幾人かとは顔なじみだが、会議にはなんとなく出にくい。

刀根麻理子が到着したのは、午後九時ごろだった。

名古屋での仕事を終えてから駆けつけたのに、ちっとも疲れが見えない麻理子に、

由希子は待ち兼ねていたように飛びついた。

「見つけたのよ！ わたしにドナーが！」

麻理子には、初耳だった。

「見つけた、見つけたのよ。これでわたしは助かる！ 助かるのよ、刀根さん！」

身体いっぱいに喜びをあらわす由希子に、麻理子も手を取り合って喜んでくれた。

刀根麻理子が食事をとっているあいだに、風呂を浴びた由希子は、頭にバスタオルを巻いて再び麻理子の前にあらわれた。ハラリとタオルを取る。

「アレ？」

「そうよ、これ自毛なのよ。似合うでしょ」

ロングヘアも落ち着いた風情を見せていたけれど、あれはカツラだった。由希子は、ショートカットながら似合っていると自負していた。

「どんな髪型にしても、本当に綺麗なのね、由希ちゃんって」

「そうでしょ」

由希子は屈託なく答えたが、実はこのころ熱に悩まされていたのである。

「わたし、もう寝ます」

階段を上がっていく由希子が、無理を重ねているのではないかという視線で、麻理子は見送っていた。

カメラの前に立つてくれる患者はきわめて少ない。そんなところへ、積極的ともいっていいくらい応じる由希子は、どのマスコミにとつてもありがたい「素材」であった。

しかし、明るくて、しっかりしているように見えても、まだやっと二十歳にすぎない。周りにだれかいないと、マスコミの無理な要求にもつい応じてしまいかねない。

刀根麻理子は、自身が歌手でありながら、テレビがあまり好きではない。芸能人にしては珍しく、かなり覚めた目でマスコミを観察することができると存在だ。テレビが陥りやすい傾向として、自分たちが敷いたレールに乗せたがることをよく知っていた。

だが、このときのセミナーで、全国から集まってきたボランティアは、由希子のドナーどころの話ではなかった。

骨髄移植に付随して、重大麻酔事故のあったことが、セミナー直前の五日にマスコミ報道されたばかりで、一日目の会議は、この話でもちきりだったのである。

そもそもセミナー開催は春に計画され、全国のボランティア仲間が親睦しんぼくを深め合お

うということになっていた。ところが、七月下旬の全国代表者会議で、麻酔事故の概略が報告されたため、マスコミ報道がなかったとしても、麻酔事故をどうとらえるかは、避けられない議題だったのである。しかも事故発生は、日本骨髄バンクが発足する前の九〇年十一月で、兄弟間移植であった。

それだけに、初日の会議は麻酔事故の話題一色となった。

バンク運動を進めてきたとはいっても、由希子の場合は、いわば「一匹狼」的な存在で、全国の仲間と一緒にあって、といった運動とはやや違う。

だから、由希子としては、遠慮するといった気持ちで会議には出なかったのだが、ほかのボランティアにはそうは見えなかった。

刀根麻理子は、そのあたりを敏感に悟っていたらしい。

大谷貴子が到着したのは、午前零時を過ぎていた。まだ議論をつづけるグループもあったが、多くは割り当てられた部屋で眠りに入っていた。

翌朝、由希子が一階の洗面所に降りたら、麻理子が顔を洗っていた。

「こんなこと言うのは、なんなんだけど、由希ちゃんねえ」

「なに、なに？」

相変わらず屈託がない。

「由希ちゃん、マスコミのおもちやになっちや駄目よ。体調があまりよくないようだし、敷かれたレールに乗っていいのかしらって、わたし感じるのよ。それでなくても、こうして全国からボランティアが集まっているんだから、こういう人たちのことを、もう少し真剣に考えたほうがいいんじゃないかしら」

言われてみれば、由希子にも感ずるところがある。唇をかみしめる姿を、初めて麻理子に見せた。

二日目の会議が始まった。分科会に分かれて、各地の活動報告を基に意見が交わされた。その場に、由希子も顔を見せたのだ。しばらくして、由希子が泣き出した。涙がとめどなく流れて、畳を濡らした。

泣きつづける由希子を、貴子が廊下に連れ出した。離れて座っている麻理子に、後悔に似た気分がきざした。先ほどの言葉につられて出席したものの、本当はいいややながらで居づらくなったのではないだろうか……。

「そうじゃないの。わたしは患者のために、全国のボランティアが、こんなにも一生懸命やっているなんて、今まで知らなかったの。そういう話を聞いていたら、今までのわたしは、何をやっていったんだろうって、泣きたくてしょうがなくなってしまうたのよ」

休憩時間に由希子の部屋へすつとんできた麻理子に、目をはらした由希子があった。もう涙は出ていない。

「わたし、まっすぐ帰るわ」

この日は、菅平高原の牧場で、馬に乗る予定になっていた。テレビ局が、その姿を映像にとらえるスケジュールだった。しかし、由希子なりに、麻理子の言葉と、会議でのボランティアの存在に触発された部分が、すこぶる大きかったのだ。

これによって、もう取材してくれないかもしれない、ドナー登録に影響しないかしら……そんな不安も頭をもたげたが、熱も出ていたので決断した。

由希子が講演して回ったのは陸上自衛隊が中心だが、訪問する候補地は、夏を過ぎた段階でまだ全国に五カ所あった。

九月十八日の防衛大学校訪問が、由希子の講演の最後となる。九月二十四日に入院することが決まったからだ。

横須賀市の防大には、初め貴子が赴く予定になっていたが、どうしても別の会合に出なければならず、由希子がピンチヒッターとなったのである。

横浜までは恋人の茂隆も同行したが、茂隆は新横浜駅前のホテルで待っていた。

由希子の講演には、千六百人の学生全員が参加した。ドナーが見つかってから初めての講演だから、さすがに嬉しさは隠せない。一部を除いて、ほとんどの講演で涙を見た由希子だったが、防大だけは終始、笑顔がつづいた。

講演を終えてから、学生が一人追いかけてきた。
「この前のテレビを見ました。握手してください」

聞いてみたら、八月二十九日に放映された番組だった。茂隆も「恋人」として登場してちょっぴり恥ずかしかったけれど、なんだかスターになったような気分を味わった。